



「世に記」を「世に記」
「世に記」を「世に記」
「世に記」を「世に記」

JR上野駅近くから御徒町駅までのガード下は有名である。俗に「アメ横」、正式には「アメ屋横町問屋街」。菓子、食料品、洋品雑貨、ゴルフ用品、それに「舶来品」を扱う店がひしめき合っている。市価よりも安いというのがウリで、約四百軒。どうして「アメ横」などというのか？ 一説によると、終戦直後、ここに闇市ができて、その多くがあめ屋だったのでこの名がついた。別の説によると、進駐してきたアメリカ軍の兵士の放出品を売る店が軒を並べたのが始まりともいう。

いっぽうJR有楽町駅近くから新橋駅付近までのガード下は、有名ではない。ちっとも知られていない。

「ヨン開発株式会社」とそえてある。これが持ち主らしい。東海旅客鉄道は一般にいうJR東海のことだろう。つぎの東京ステーション開発はJR東海の子会社で、管理の実務を担当しているのではあるまいか。私のような世の中にといて人間にも、その程度のこととはわかる。また百にちかい部屋のほとんどにシャッターが下りていることから、社名として「ステーション開発」を名のついても、当ガード下は開発を放棄したらしいこともわかるのだ。

一階の中ほどあたりに「鉄道建築協会」が入っていて、そこはシャッターが下りていない。たいそうな名称だが、ごく小規模の協会のように、いつもひっそりとしていて、人がいるのかいないのかわからない。一般社団法人とあるから、東京ステーション開発傘下にあつて、JR東海の定年組の受け皿につくられたのかもしれない。

同じくシャッターの下りていない少数の一つだが、こちらはドアには標識がないので、いかなる店子か不明である。ただドアの横に紙が貼つてあつて、レッキとした現役であることはわかる。

「痰、唾を吐きかけないで下さい

だが、ガード下の由緒でいうと、たぶんアメ横よりも古いだらうし、つくりも立派である。アメ横は蜂の巣のような雑多な店の集まりだが、こちらはまん中に通路をもち、左右とも整然と区分りがされ、要所に鉄の手すりのついた階段があつて、二階に通じている。一、二階合わせて百ちかい部屋があるものと思われる。

「思われる」などと曖昧なのは、階段ごとに大きな注意書きがあつて、通せんぼがされているからだ。

「私有地につき、関係者以外の立入を禁止する。立入った場合、警察に通報します」

血のような赤い字で、薄暗がりにもあざとく見える。

黒字で小さく「東海旅客鉄道株式会社／東京ステーション

産経興業株式会社

二駅にまたがるような長い通路があつて、痰や唾を吐くならどこでもよさそうなものだが、なぜかこの辺りに集中する理由でもあるのだろうか……。

散歩で寄るたびに、あれこれ首をひねる。謎がいっぱいあるからで、来るたびに謎が深まる。世界都市 TOKYO にあつて、もつとも謎めいた空間ではあるまいか。

道路をへだてて西側はインペリアルタワーと帝国ホテルである。東側は銀座六丁目から八丁目にあたる。そのただなか、とびきり華麗な両雄にはさまれて、死んだような空間がひっそりとのびている。名前がないのは可哀そうなので、私はひそかに「韃靼海峡」と呼んでいる。日本のモダンズム詩人安西冬衛の「春」と題した一行詩にちなんでいる。

てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた。

「韃靼」は中国の北辺、旧満州、蒙古、シベリアから中央アジアにわたる地域の古称というが、すこぶる曖昧模糊とした名称である。そのわけのわからなさが謎